Japanese Association for Religious Studies

いる事実は、中国におけるチベット仏教の動向を理解する上で重要な鍵と言える。

アチュウの後継者はアソン・リンポチェである。アチュウは十数年の歳月をかけて、権威の一部をアソンに委譲してきた。アチュウ圓寂に伴い、アソンが葬儀委員長を務め、アチュウの遺言を修行者に伝達する役割を担ったことから、ヤチェンの新たな主宰者としてアソンが承認されたと考えられる。また、アソンの後継者として複数の若い転生ラマが育成されている。その中でリンジン・ワンシュが注目を集めている。

中国社会の中でヤチェンの存続が許されている理由を掲げる。寺院ではなく修行地（短期滞在者）という政府の位置づけ（定員制の対象外）、ダライ・ラマ亡命政府との希薄な関係、地元政府との良好な関係、修行地規模拡大による地元への経済効果、社会の安定に宗教の社会貢献が不可欠という中国政府の新たな方針（二〇〇七年）等である。

東シナ海周辺地域の媽姐信仰と日本の聖母信仰

本間　浩

媽祖はもともと中国東南沿岸で信仰された海上安全の一地方神に過ぎなかったが、人々の国内外の移住往来に伴い、海上活動の守護神からより広い意味での全体的な守護神として祀られるようになり、幅広い信仰を獲得するに至った。また、歴代王朝からも冊封を度々受けるようになり、国家に承認された護国の神としても信仰された。今日でも、中国・台湾のみならず、東南アジアをはじめ、世界各地に媽祖廟が見られる。

媽祖は発生当初こそ海上安全、海上守護の神として信仰されていたものの、時代が下るにつれ、海上安全の性格を保持しつつも、妖怪を屈服させる神、賊を防御する神、子を授け、庇護する神など、民間においては様々な利益をもたらす神として、あるいは国家においては後述のようにこれを守護する神として祀られて行ったと考えられる。

東南アジア在住の華人においても、媽祖は基本的には海上安全の守り神として祀られているが、一部では家族の守り神、商売繁盛の神、大漁の神としても祀られており、あるいはイポーなどでは海の平安の神とされている。フィリピンの華人会館にも媽祖神廟、あるいは神堂に媽祖が祀られており、ある天主教の教堂には、洋服を着た媽祖が祀られているそうである。一九五四年には、全世界の天主教の信徒がフィリピンに集まって祈禱会を催した際、ローマ法王が媽祖を天主教の七大聖母の一に封じ、戴冠式を行なったと言う話まである。

東シナ海周辺各地域の媽祖廟は、華僑・華人の海外進出に伴って建立されるようになったと考えられ、それは我が国においても例外ではない。琉球には十五世紀に東シナ海を通って、那覇に華人居留地が出来たのに伴い、上・下の天妃宮が建立され、これが明との朝貢船団あるいは東南アジア各地との貿易の守護神となっていた。

媽祖には「天妃」「天后」あるいは「霊惠夫人」「霊惠妃」など様々な呼び名があるが、とりわけ台湾では「天上聖母」「聖

NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies

母廟」など「聖母」の名を冠して祀られる例が一般的である。我が国でも神祇信仰において、天妃社に「天妃聖母神社」としてこれを祀る例が見られ、これは鎌倉時代以降、神功皇后を「聖母大菩薩」「聖母神社」などとして祀る従来の日本の聖母信仰とは趣を異にしている。これは、日本の聖母信仰を考える上でも興味深い事例と言えるので、本発表では、媽祖を「聖母」として祀る信仰に注目し、これを日本の聖母信仰のひとつと位置づけて考えてみたい。

神社において媽祖が祀られている例としては、青森県大間町の大間稲荷神社、宮城県七ヶ浜町の旧御殿崎稲荷神社、茨城県北茨城市の磯原天妃山・弟橘姫神社、大洗町の磯浜天妃山の四例を確認する事が出来る。これらの媽祖信仰の変遷を追った結果、媽祖はもともと、中国伝来の海上活動の守護神として祀られ始めたものの、時代が下るに連れて民間習俗、民間信仰に溶込み、信仰の形を変えていることが窺える。これはキリスト教におけるマリア崇拝、仏教における観音信仰や鬼子母神信仰、あるいは日本の神功皇后など、他の聖母信仰にも見られる傾向であり、媽祖信仰もその特徴をよく備えた聖母信仰のひとつであることを、以上の例は表わしていると結論付けたい。ゆえに、日本においても、民間では、媽祖はあるいは普遍的な「聖母」の観念をもって信仰されていたことが窺え、天照大神を聖母として祀る信仰などと併せて考えても、これを日本の聖母信仰のひとつとしてみなすことに何の異論もないように思われるのである。

一九九〇年代台湾の社会変化とアミ族宗教のシャーマニズム的対応

原　英子

一九九〇年代前後の台湾には大きな社会変化がおこっていた。八八年に蔣経国が死去し、本省人の李登輝が総統になったことは台湾社会に大きな影響を与えた。台湾先住民の社会的環境も変化し、行政院原住民族委員会を中心に先住民族の主体性を強化する様々な動きがおこった。それに呼応して先住民族の人々自身が自文化に対する意識を変化させていった。それまで迷信とみられていた先住民族のシャーマンを中心とした宗教も、民族文化のひとつとみなされ、シャーマンも民族文化の継承者と位置づけられるようになっていった。こうした状況について、台湾先住民族、アミ族をとりあげ、その宗教の変化をシャーマニズム的対応という点から分析し、台湾社会との関連を考察した。

まず台湾社会の先住民族社会の変化だが、一九九四年に先住民族に対する公式名称が「台湾原住民」となり、九五年には民族名での名前の登録ができるようになった。九六年には政府行政院に原住民委員会が作られ、先住民族の主体性を発揚するための役割を担っている。九四年に民進党の陳水扁が台北市長になって以降、台北の道路名が周辺に居住していた平埔族にちなみケタガラン大道とされた。また、陳が総統になってからは、先住民族が新たに認定され、それまでの九族に加え、全部で一

NII-Electronic Library Service